

バックキャスト思考による2045年の理想の未来像創出手法の開発とその効果に関する研究

Study of the development and effect verification for the method of ideal future vision in 2045 by backcasting thinking

平本 督太郎, 蟹谷 慧
Tokutaro Hiramoto, Kei Kanitani

概要 本論文では、バックキャスト思考による2045年の理想の未来像創出手法が、人々が地球規模課題を自分ごととしての理解に役立つことを仮説とし、その立証を行った。その際、特に大学と民間企業といった異なる領域の組織における共通点が存在するかどうかといった領域横断型の視点から研究を進めた。本論文では、開発した2045年の理想の未来像創出手法を用いた人々と、用いなかった人々との間にどのような違いが生まれたのかを調べた。結果として、開発した手法は人々の地球規模課題に対する意識と、未来の技術を活用した際の働き方や時間の過ごし方といった身近な生活に関する意識の間の関係付けに有効であることが明らかとなった。

キーワード：バックキャスト思考, 未来像, テキストマイニング, SDGs.

Abstract In this paper, we hypothesized a method of ideal future vision in 2045 by backcasting thinking makes it easy to understand global scale topics as one's own affair. In addition, this paper has specifically focused on the common factor between universities and private corporations. We then examined elements of differences of ideal future vision in 2045 between people with this method and people without it. The results show that it creates a connection between global scale topics and people's attitude of time management and work style with technologies in the future.

Keywords: Backcasting, Future vision, Text mining, SDGs.

1. 研究の目的と背景

SDGsにおいては、バックキャスト思考が重要な思考方法の一つとされ取り入れられている。バックキャスト思考とは、あるべき未来を描き、そこから逆算して現在行うべき活動やその優先順位を決めるという思考方法である。相対する思考方法としてはフォアキャスト思考が存在し、現状からの積み上げで未来像を描くという手法である。SDGs そのものもこのバックキャスト思考により描かれており、世界で合意した2030年までに達成すべき姿が描かれている。

現在、SDGsにおいては、その合意した未来像をより具体的に描いていく取り組みが世界各地で行われている。例えば、内閣府が推進するSDGs未来都市という制度においては、各自治体が2030年までに達成したい未来像を提示した上でその実現に向けた活動を申請することにより、補助金の支給等による優遇措置を受けることが出来る¹⁾。

他方で、日本においては、SDGsの次のゴールの策定に向けた準備についても議論がなされ始めている。例えば、2025年日本国際博覧会においては、日本館を「SDGs+beyond館」とするという構想が打ち出され

ている。SDGs の前身である MDGs の期間において、後の SDGs となるポスト MDGs が本格的に検討され始めたのが 2010 年であるため、ポスト SDGs の検討が本格化するのには 2025 年頃だと予想される。そうすると、2025 年日本国際博覧会は、日本がポスト SDGs に関する考えを世界に発信していく絶好の機会になると考えられる。

一方で、日本人は世界に対してあるべき未来像を提示していく事自体に不慣れである。実際に、1000 万人以上が策定プロセスに参加した SDGs においても、日本人の参加者は一部の政府関係者・研究者・有識者等に限られており、ほとんどの日本人が参加をしていない。こうした状況において、国連 100 周年であり、SDGs の目標達成年 2030 年の 15 年後である 2045 年の未来像を描くための手法論を確立することは、多くの日本人がポスト SDGs の策定プロセスに参加をし、2025 年日本国際博覧会という国際発信の機会を活かすために必要だと考えられる。

こうした背景をもとに、本研究では 2045 年の理想の未来像創出手法を考案し、実施するとともに、その効果を検証することを目的としている。具体的には、企業、教育、それぞれの領域において、バックキャスト思考により実現可能性が高い未来に関する情報を事前にインプットし、地球規模で生じる出来事について個人の生活像にまで落とし込むというアウトプットをすることが、各個人が描く 2045 年の理想の未来像の内容にどのような影響をもたらすのかを明らかとする。分析手法としてはテキストマイニングを用いることで、アンケート回答者が描いた 2045 年の理想の未来像に本研究で開発した手法が与える影響を明らかとする。

2. 先行研究と本研究の位置づけ

従来から、中長期の視点によって理想の未来像を描き出し、それを目標とする試みは様々なセクターにおいて行われ研究が進められてきた。特に本稿ではビジネスと地域デザインの 2 つの領域での取り組みに注目したい。なぜならば、日本においては、SDGs に関してこれらの 2 つの領域が人々からとても高い関心を持たれているからである。Google トレンドで SDGs が国連総会で全加盟国からの合意を得た 2015 年 9 月 25 日から 2021 年 9 月 5 日までの期間、日本において SDGs と関連してどのような言葉が検索されてきたかを調べると、最も検索数が多い用語として抽出される語句は「取り組み」だが、その次に「日本」、そして次に「企業」が抽出される。国を地域の集合体として捉えれば、地域とビジネスについて関心が高いことが読み取れる。実際に、理想の未来像を描き出す取り組みも、この 2 つの領域においては SDGs という概念が登場する以前から活発に行われている。そのため、本研究ではビジネスと地域デザインという 2 つの領域に注目して先行研究の整理を行っていく。

さらに、本研究で整理しておくべき先行研究として、本研究で研究手法の一つとして採用するテキストマイニング手法を用いた研究がある。理想の未来像の描写は、ビジネスと地域デザイン双方の領域において、その取組に参加する個人の考え・意見に基づいて行われることが 2 つの領域における先行研究を行う中で明らかとなってきた。しかしながら、個人の考え・意見は定性情報であり、客観的な分析を行うためにはその情報自体を定量情報へと変換した上で分析を行う必要がある。テキストマイニング手法は、定性情報を定量情報へと変換した上で分析する手法であり、既に多くの研究で用いられていることから研究手法が確立してきている。そのため、本研究では研究手法として採用するとともに、テキストマイニング手法を用いた本研究に関連する先行研究についても整理しておくこととする。実際に、テキストマイニング手法を用いた研究においても、特定の集団が未来像を描く際にどのような特徴が抽出されるのかに注目した研究が存在する。こうした取り組みを整理し、現状での限界を示すことで、本研究をすすめる上で注目すべき点を明らかとし、本研究の位置づけを明らかなものとする。